

# 患者を生きる

2947

## がん

東京都内に住む大久保淳一さん(51)は2007年2月、家族で長野県軽井沢町に旅行をした。

大久保さんの趣味はランニング。この日も、早朝に目を覚ますと、宿泊先の部屋を抜け出した。そして、別荘地の道路を走った。

アスファルトの路面は、解けた雪が再び固まり、滑りやすくなっていた。下り坂で足を取られた。「アッ!」。声を上げたときは、すでに坂を駆け落ちていた。右足がジンジンと強烈に痛む。足首の骨が折れ、靭帯も切れてい

た。現地の病院では対応できず、妻の英子さん(45)が運転する車で東京へ戻った。そのまま、東京慈恵会医科大学付属病院(東京都港区)に入院。5時間の外科手術を受けることになった。

大久保さんは当時、東京都内の外資系証券会社に勤めていた。新しい金融取引のマーケティングを担当する部長として、バリバリ働いていた。

「1カ月入院すれば、すぐ職場に復帰できる」。そう信じて、手術後のリハビリに取り組んだ。

## 心の中で「うそだ!」

ところが、退院を翌日に控えた3月上旬の夜、偶然「異変」に気付いた。

左右の睾丸の大きさが違う。しかも、右の睾丸が小石のように硬くなっていた。

「何か、まずいことが体に起きているのでは?」

そう直感した。不安で寝付けなのまま、一晩ベッドの上ですごした。翌朝、医師に相談すると、すぐ泌尿器科へ行くよう勧められた。

超音波検査や血液検査などの

## ネットでつながらる①

後、泌尿器科講師の木村高弘医師(44)が言った。



ランニング中に骨折。当初は「1カ月で職場復帰できる」と思っていたが……07年2月、本人提供

「がんの疑いがあります。精巣腫瘍です」

「がん」という言葉に衝撃を受けた。精巣に硬いしこりができているうえ、血液中の「腫瘍マーカー」の値も異常に高かった。

精巣がんは比較的進行が早く、数日中にも右側の精巣を摘出するのが望ましいという。退院直後に再び入院する必要があった。木村さんは丁寧に説明したが、大久保さんはその言葉を、どうしても受け止めることができなかった。

「そんなの、うそだ!」。心の中で叫んだ。(山本智之) ◆5回連載します。